

富山の婚礼

—受け継がれる伝統、廃れる伝統—

A study report on wedding in Toyama

Both traditional ceremony still play today and ceremony already missing

山田 真弓

Yamada Mayumi

文化マネジメントコース

私の興味は、結婚式、特に近代以降の形態の変化や、地域特有の伝統的な結婚式にある。現在、結婚式は専門式場を始めとした様々な場所で、それぞれが自由な形式を選択して、盛大に行われている。雑誌に掲載されている情報や、テレビメディアから流れてくる情報を見てみると、最近では“自分たちらしい”結婚式が流行しているようで、それぞれのカップルに合った結婚式をつくるために、結婚式をめぐる様々なものが多様化してきている。

昔の結婚式とって思い浮かぶのは、角隠しに白無垢を着た花嫁さんと紋付袴の花婿さんが座敷の上座に座っていて、それぞれ両側に親族が並んで座り、式も披露宴も一緒になった宴会。というような光景。それがいついつから純白のドレスを着てバージンロードを歩き、教会で神に愛を誓うようになったのか。また、自宅で行っていた婚礼がどのようにして家の外に出ていったのか。日本全国それぞれの地域に根付いている伝統的な婚礼儀礼は受け継がれているのか、いないのか。受け継がれる伝統と廃れる伝統、その違いはなにか、なぜそうなったのか。

本稿はこれら2つのテーマに基づいて、歴史については先行研究を、地域の伝統的な婚礼については、富山県を題材に、聞き取りを中心とした事例調査を行い、結婚情報誌「ゼクシィ」（リクルート発行）の結婚トレンド調査2009（全国・首都圏版）と結婚トレンド調査2009（富山・石川・福井版）、国際大学教授、浜松誠二の「富山を考えるヒント」など既存の統計データから、富山の特徴を考察。事例調査では、富山県の婚礼スタイルを調査するため、様々な年代を対象に2009年10月から12月の期間、富山県で調査を行った。質問の内容としては、出会ったきっかけ、結婚を決めた年齢、式のとときの年齢、式までの段取り（結納の有無、その他の儀式）、挙式の形式と有無、披露宴の形式と有無、婚礼の仕切り人、食、衣裳、招待客、引き出物、予算、婚礼を行った理由、一連の準備の大変さ、その他特徴的な儀式、について調査した。その他、美容師さんや、式場・神社の人にインタビューをし、富山県のしきたりや特徴的な儀式についてインタビューして、どの程度伝統が受け継がれているのか、富山県の伝統的な婚礼儀礼はどのようなものがあるかなどを調査した。

婚礼の歴史

明治以降、日本の結婚式を大きく変化させたのは、明治の新憲法の完成に加え、皇室の婚礼儀礼を規制、成文化した皇室婚嫁令の完成。天皇制が強化されたこの時代、皇室婚嫁令ののちの皇太子嘉仁親王（大正天皇）の結婚式が行われ、神前結婚式が誕生した。上流階層では神前式を行う人が出始めた。一方、神前結婚式を行わない人びとは江戸時代から続く家と家を繋ぐ結婚式を自宅で行っていた。

この婚礼は、近隣への聞き込みによる婚家の身辺調査から始まり、仲人をたてての見合い、結納、婚礼、近所への紹介など、家と家、地域と地域を繋ぐ、家族制度を色濃く表した婚礼であった。

その後、昭和に入り日本国憲法が公布されると、産業の工業化に伴い、合理化思想の浸透、徐々に廃れ始めた家制度の崩壊によって、家と家の結びつきから個人対個人の結びつきへと変わっていった。さらに、核家族化や女性の高学歴化が進み、団塊の世代では3～4歳上の男性との結婚ができないという女性が増え、同年齢婚＝友達婚が出現し、ニューファミリーと呼ばれる家族が出現した。車の普及とあわせて、夫婦と子供二人の4人世帯の核家族のライフスタイルが伝統的な慣習を変革していったことになる。それに伴い、結婚式の主導権が親から新郎新婦に移り、“自分たちらしい”結婚式が可能となったのである。結婚式が自宅で行われなくなった理由は、神社が新しい式、神前結婚式を広めたことが、式を外へと連れ出す一因となり、戦争によって強制的に家を奪われ、婚礼をする場所がなくなったこと、次第に婚礼が行えるような広い座敷を持った家が減少していったことが、自宅での宴会を披露宴としてホテルや専門式場へと導いたのである。そして、披露宴会場として機能し始めた施設（ホテル・料亭・神社・式場など）の元来の個性が、新郎新婦の求める“自分たちらしさ”と合致し、相乗効果的に成長してできたのが現在の結婚式スタイルであると考えられる。平成に入ると、結婚に対する意識が変化し始め、晩婚化、非婚化が進行。夫婦の年齢差が小さくなり、友達婚が増加するなど今までとは違った現象が起こっている。

富山の特徴と婚礼

富山県は、人口移動が全国的にみて非常に少ない県であるという特徴がある。さらに、世帯規模が大きく、三世帯世帯の割合が多い県であるので、小さなときから祖父母の話をきいたりみたりする機会が多く、伝統にふれる機会も多くなっているといえる。これはつまり、富山県出身者は富山県に多くとどまっており、しかも三世帯世帯が多いので、富山県独特の伝統が受け継がれやすい状態であるといえるであろう。富山県民の意識の特徴は、しきたりや神仏、先祖へのつながりは重要と考えていないにもかかわらず、結婚式を行うのは当たり前、となっており、実際にはしきたりを重んじている所がある。そして、富山県民はよく稼ぐ世帯主、よく働く妻、高い年金をもらえる退職者という世帯が多いため、全国の中でもお金持ちの県と言えるが、消費傾向は極めて消極的である。しかし、結婚費用は全国でも高く、伝統的な儀礼には、金銭を惜しまない傾向がある。



図1 花嫁のれん

事例調査の結果、新婦が新郎の家の水と、実家の水を合わせて飲む“水盃”、新婦が嫁入り1年以内に新郎の家にブリを贈る“嫁ブリ”、新婦が新郎の家に入るときにくぐる“花嫁のれん”(図1)、引き出物に鯛のかまぼこや、飾りかまぼこを入れたり、“かごもり”と呼ばれるものを入れたりする。“かごもり”には、大抵かまぼこが入っていて、それ以外は洋菓子、ワイン、果物などを入れる。20～30年前には多くの伝統的婚礼儀礼が確認できた。この中でも、引き出物のかまぼこや嫁ぶりは、現在でも多く行われている。県民の意識としては、比較的伝統を重んじないという結果が出ているが、インタビューの結果、結婚式を行う、という伝統意識に関しては、非常に高い割合で受け継がれているという結果がでている。

その他にも、事例調査の結果として特徴的なのが、同じ市内出身の夫婦が20件中10件、地図上で隣りの市出身が5件で、結婚相手を比較的近くの地域内で選ぶ傾向がみられることである。

この伝統儀礼調査を通して、長い間継承されている儀礼の中でも、食べ物に関する儀礼は、その他の儀礼に比べて受け継がれやすいのではないかと感じた。従って、富山県では、引き出物にはかまぼこを入れる、嫁ぶりを贈るという習慣は受け継がれていくと推測する。かまぼこはぶりに比べ安価であるため、より受け継がれやすいと考えられる。

今後の課題

最後に、富山県の結婚式の今後の課題として、調査結果では結婚式をすることは当然で当たり前であると多くの人が回答しているが、現在に近づくにつれて、親のすすめというような回答も混ざってきた。

今後、この親のすすめで結婚式を挙げた夫婦が親世代となり、こどもたちが結婚式を挙げないと言ったとき、やはり自分の親と同じ気持ちでこどもに結婚式をすすめるのか。それとも、自分のときは挙げたが、本当はどちらでも良かったのだから、と、自由にさせるのか。その結果、全体として結婚式を挙げる夫婦は減るのか。大変関心があるので、今後も観察を続けたいと思う。

【主要参考文献】

- 志田基与師『平成結婚式縁起』日本経済新聞社、1991
- 国立社会保障・人口問題研究所 実地調査（社会保障・人口問題基本調「結婚と出産に関する全国調査－出生動向基本調査－2005」
- 富山国際大学教授 浜松誠二ホームページ「富山を考えるヒント」